

会員紹介：岩波美智子さん

私の略歴



バーミンガム大学の卒業式

物心もつかぬうちの3歳から13歳まで、父の仕事の関係でオーストラリアのシドニーに在住。大半を現地校で過ごし、途中から日本語を学ぶために日本人学校へ。帰国後、中学校・高校は、周りの人が日本人・近隣に住むという、普通(?)の学生生活を過ごし、シドニーにいる時にビデオで見たドラえもんやサザエさんやちびまる子ちゃんといった日本のアニメの世界が本当にあるのだと実感した。2002年に青山学院大学経済学部を卒業し、国際開発に目覚めて早稲田大学アジア太平洋研究科の修士課程に進学。更に学問的研鑽を積むために、英国のバーミンガム大学博士課程で「水道事業」について研究し卒業した。2010年に双日総合研究所に職を得て、途上国のインフラおよびインフラ関係を含む他分野の研究に従事

している。

国際開発との出会い

国際開発との出会いは、青山学院大学経済学部の「経済発展論」という授業で、途上国では生活のために必要不可欠な水道インフラでさえ十分に整備されていない状況があることに驚いたことだった。また当時は、持続可能な開発目標のSDGsの前身であるミレニアム開発目標(MDGs)が策定された時期であったこともあり、途上国では何故そうした事態が起きているのかと疑問に思ったことが、国際開発に関心を持ったきっかけだった。

大学院で学んだ国際開発

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科(修士課程): 阿部義章教授の「経済発展とインフラ」ゼミでは、水道を始めとする様々なインフラが十分に整備されていないことによる生活への影響、また状況改善のための政府の政策やそれらの後ろ盾となる理論を学び、政府と企業との協働により開発政策を実施することが潮流になってきていることを知り、インフラサービスも同様であることを学んだ。阿部義章教授は世界銀行での約30年の勤務経験をも交えながら授業されており、説得力ある授業だった。

アジア太平洋研究科ではアジアからの留学生が多く、図書室やミーティングスペースでは、英語はもちろんのこと、中国語・ベトナム語・タイ語・インドネシア語などアジ

ア諸国の言葉を中心に、ドイツ語・フランス語など西洋諸国の言葉が飛び交っていた。また、ゼミはそうした留学生が半分を占めていたことから、英語で実施されていたので、あたかも海外留学をしているかのようであった。留学生から自分の国の現状を聞き、また、彼らと友達になれたことは大変嬉しかった。その後、出張の際に機会を見つけて再会するなど、今もなお連絡を取っている。

英国バーミンガム大学(博士課程): アジア太平洋研究科卒業後は、官民連携の水道事業が専門の英国バーミンガム大学 Andrew Nickson 教授を頼り博士課程に進み、途上国での水道情勢に関する研究を進め、博士論文ではインドネシアの首都であるジャカルタ市の水道コンセッションを事例とし、市民が直面する水に係る様々な問題、供給体制の不備、そしてそれらの発生原因を指摘した。現地調査では、ジャカルタ市民とのグループディスカッションだけでなく、ジャカルタ市水道局 (PAM Jaya) や当時同市の水道事業を運営していた Thames PAM Jaya (TPJ) や Pam Lyonnaise Jaya (PALYJA) など様々な組織にインタビューを実施した。

バーミンガム大学でも早稲田大学同様、自国の英国人だけでなく、アフリカ・アジア・欧州各地からも学生が学びに来ていた。留学当時は学部と大学院に授業を持っていた時期もあったが、英語を母国語としない学生でも遜色なく英語を理解し、積極的に発言し、プレゼンテーションをしていたことが印象的だった。また私の感じるところ、内容だけでなく、発表内容の必然性、独自性、発表領域の情報収集・分析方法等に関して包括的に伝えていたので、こうした伝え方をすることが同じ内容でもより効果的に相手に理解してもらうには重要なのだと実感した。

これまでの仕事の内容

バーミンガム大学卒業後、双日総合研究所に入社。入社して4年ほどは経済産業省や国土交通省等の官公庁の海外調査・報告業務等に従事した。最初に従事したのはモンゴルの石炭に関する調査・研究事業で、真冬に出張したこともあり、マイナス35度の中を歩いて家計調査を実施したことが印象に残っている。また特に真冬の朝は、ストーブで石炭を焚くので、匂いが強く、市内は煙で霞んでいた。



真冬の朝のウランバートル市 (2011年12月)

モンゴルのほかは、博士論文で足を運んだインドネシア、また、カンボジア、スリランカ、ブラジル、ベトナムなどで、ほとんどがアジアの国だった。調査分野は、都市開発や電力などハードインフラ分野のもあったが、ヘルスケアや大豆の市場調査なども実施した。



スリランカ コロンボ市外の送電線

調査業務に従事した後は、米州地域の渉外業務を実施し、途中本社に出向したこともあった。2度の海外出張の機会があり、両方とも大変貴重な経験となった。1度目はキューバであり、米国が国交正常化交渉を開始する発表する直前だった。2度目は米国およびカナダであり、トランプ氏とクリントン氏が選挙戦を繰り広げている最中

で、当時はクリントン氏が大統領になるであろうとの見方が大勢という時期だった。

その後、再び調査業務に戻り現在に至るが、本社の海外拠点を含む国々のマクロ経済・政治の月次資料、役員向け各種資料、産業レポートの作成・社内報告などを実施している。留学時代のイギリスはケンブリッジ大学で発表する機会もあり、仕事でイギリスを訪れることが出来たのは感慨深かった。しかも、会場が St. Catherine's College という名前だったのだが、シドニーで通った学校も St. Catherine's だったので、なお一層感慨深かった。



ケンブリッジ大学での発表の様子



同校舎

対外的には、日本貿易会の貿易動向調査委員会として、毎月の日本の国際収支の動向や日本の主産業や貿易品目に関する懇談会を聞き、それらを参考に翌年度の貿易収支の見通しを商品別で積み上げることで予測し発表している。様々な業界からみた日本、世界の状況を聞くことができるので、学ぶことが多い。

仕事上の苦勞と喜び

苦勞と喜びの両方であるが、ひとつには現地出張で現場の声や雰囲気を通じて、相手の状況を理解すること、もうひとつは、様々な立場や考えの異なる人との意見調整をすることと考える。

昨年、当社は経済産業省の「質の高いインフラの海外展開に向けた事業実施可能性調査事業」を受託し、インドネシアにおけるスマートシティの調査を実施したのだが、新型コロナの感染拡大により、一度も現地へ行くことが出来なかったのは残念であった（友人と再会する機会でもあったので！）。博士論文の調査で感じたことだが、現地に赴き、直接対話することやその土地を体感することも重要なデータ収集手段だけでなく、新たなネットワークを広める手段でもあると考えている。目下、現地調査は困難な状況だが、いずれ出来る情勢になることを願っている。

仕事を進めていく際、現状改善の積み重ねが必要になると思うが、始めのうちは、多くの人を巻き込みながら、業務の質を高めるとともに業務の量が増えることは避けられない。したがって、同僚や上司など、出来るだけ多くの人との合意を得ながら業務を進め、また、士気を高め続けることが重要だと考えている。自分の業務の改善点とその手段を相手に分かりやすく説明し、納得してもらうには時間がかかることもあるため、いざ実施できる環境になり、それを達成できると、やりがいを感じる。



共通の趣炉開きでのお点前

私の生き方

仕事を通じて学んだことは、仕事をする時と休む時のメリハリをつけるということである。この数年は、父が鎌倉で月光庵という貸茶室事業や茶道教室を始めたこともあり、日本文化に身を投じている。

同じ興味を持つ様々な背景を持つ人々と交流することにより、楽しいひと時を過ごすことだけでなく、自分の知見の幅を広げることが出来るので、有意義な時間となっていると感じている。また天気の良い日には、近くに由比ヶ浜があるため、季節の移ろいを感じながら、海まで散歩をしている。海には静かな時、荒々しい時、透き通っている時、濁っている時など、多くの表情があり、それを楽しみに出かけている。



由比ヶ浜海岸の風景